

自 己 評 価 書

(平成 2 8 年度)

平成 2 9 年 3 月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I 学校の現況及び目標 1

II 重点目標に対する自己評価 2

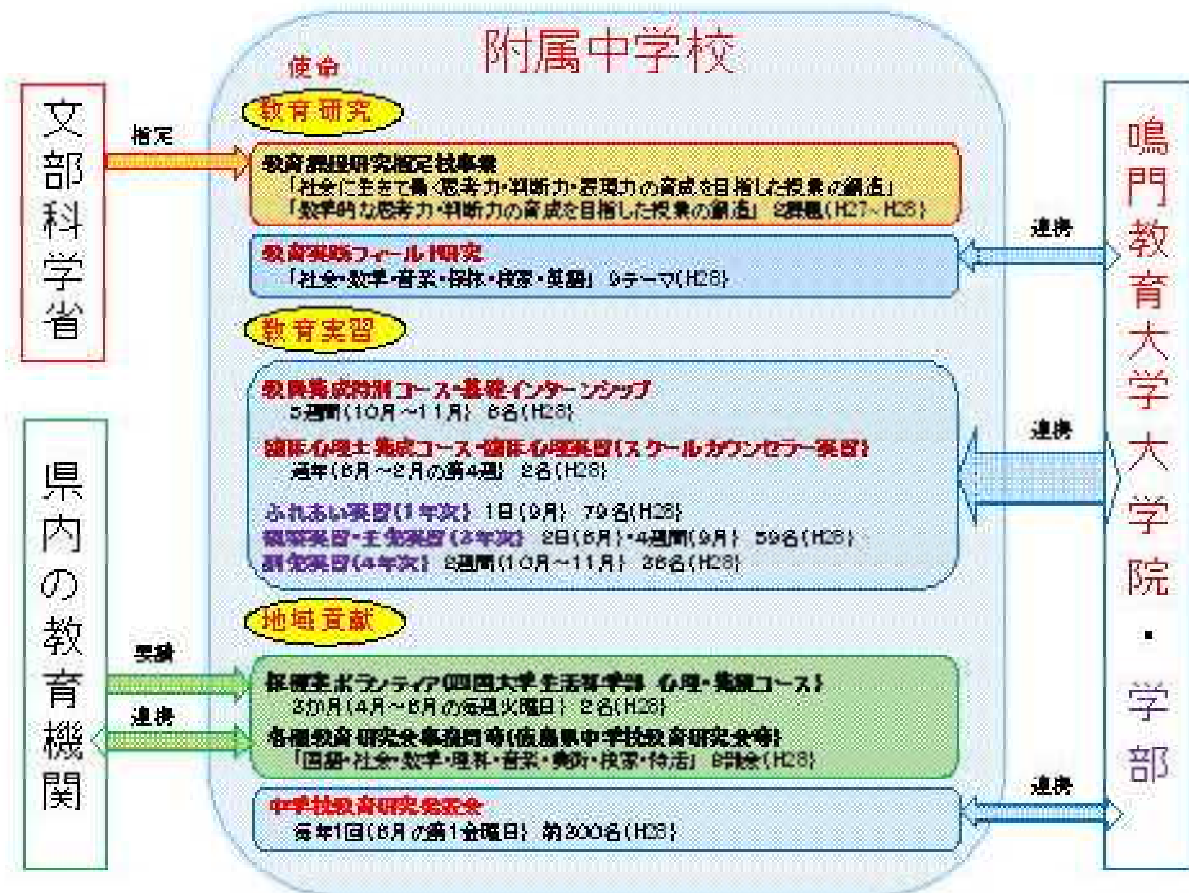
1 社会に生きて働く思考力等の育成 2

2 いじめの防止 8

3 キャリア教育の推進 14

III 自己評価根拠資料一覧 21

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(平成28年5月1日)
 - 生徒数 465人 教員数 23人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強靱な意志と体をもち、たくましく生き抜く生徒
- 優しく思いやりの心を持ち、人につくす生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- 強い使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 平成28年度重点目標（実践事項）

- ① 社会に生きて働く思考力等の育成
 - ア 汎用的な能力としての思考力等の育成
 - イ 組織的な強化連携の実践
- ② いじめの防止
 - ア 生徒の悩みの把握と情報交換
 - イ 本音で語り合う活動の実践
- ③ キャリア教育の推進
 - ア 清掃活動の活性化
 - イ かかわる力、みつめる力、すすむ力、えがく力の育成

(4) 平成28年度評価項目（評価指標）

- ① 社会に生きて働く思考力等の育成
 - ア 保護者対象アンケート（7月と12月に実施）
 - 「先生は生徒が考えたい課題を設定している」
 - 「先生は他教科での学習も踏まえて指導している」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
 - 「学習指導」
- ② いじめの防止
 - ア 保護者対象アンケート（7月と12月に実施）
 - 「学校は生徒が先生に相談できる雰囲気がある」
 - 「生徒は互いに本音を言える関係にある」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
 - 「生徒指導等」
- ③ キャリア教育の推進
 - ア 保護者対象アンケート（7月と12月に実施）
 - 「自分の子どもは家庭で役割を果たしている」
 - 「先生は委員会・係活動や清掃活動を熱心に指導を行っている」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
 - 「学級経営・学校運営・校務の処理・その他」

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 社会に生きて働く思考力等の育成

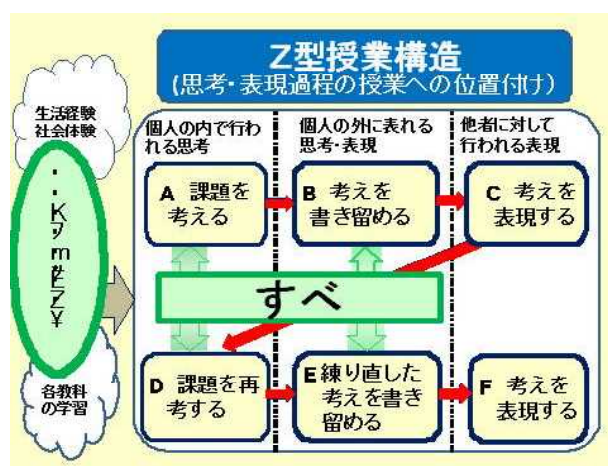
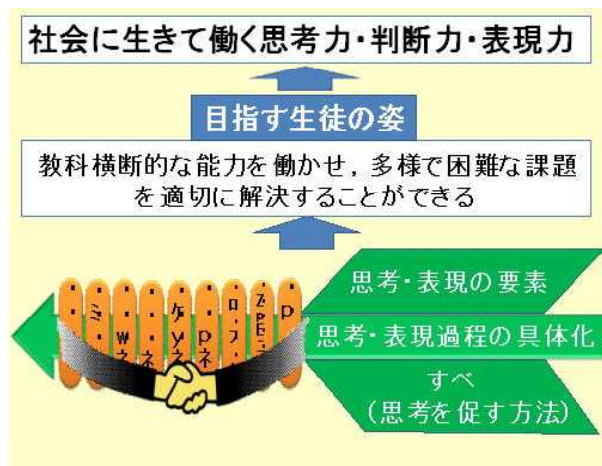
平成19年6月に改正された学校教育法に、学校教育の目標を達成するためには、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と示された。

本校は平成20年度から5年間、「思考力・判断力・表現力を育む授業の創造」を研究主題とし、各教科で連携して研究を進めてきた。平成25・26年度の2年間は、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業（論理的思考）を受諾し、「社会に生きて働く思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業の創造」を研究主題として、社会生活の中で活用される教科横断的な論理的思考力やそれらを表現する力の育成に努めてきた。

本年度も引き続き本事業を受諾し、6月に開催した研究発表会やその後の各種研究会等で、これまでの研究成果の発信に努めている。

< 研究の概要 >

多様で困難な課題を適切に解決することができる力として、社会に生きて働く思考力・判断力・表現力を育成する。そのために、授業で扱う「思考・表現の要素」を明確にし、思考を促す方法である「すべ」を活用して、「思考・表現過程の具体化」を図る。そして、まず自分で考え、その後仲間との意見交流を踏まえて自分の考えを深める授業過程である「Z型授業構造」を全教科で取り入れる。各教科が連携して取り組むことで、社会に生きて働く思考力・判断力・表現力が育成できるものとする。



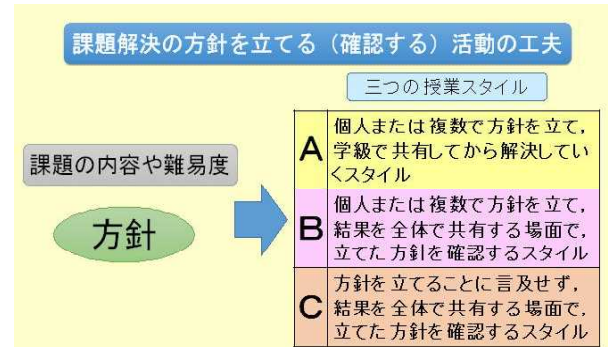
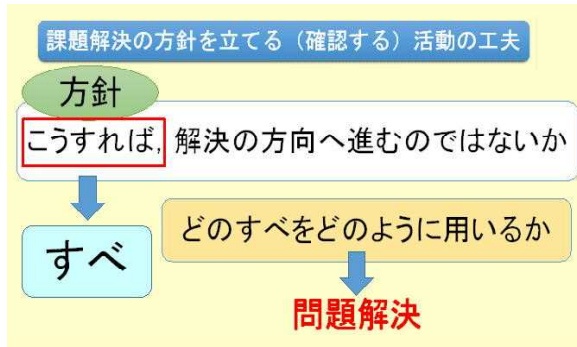
思考・表現の要素	
思考の要素	表現の要素
選択する	描写する
整理する	音読する・朗読する
予想(推測)する	記録する
仮説を立てる	説明する
構想する	紹介する
計画する	報告する
解釈する	創作する
鑑賞する	制作(製作)する
把握(理解)する	
分析する	
評価する	



1 実践事項への取組

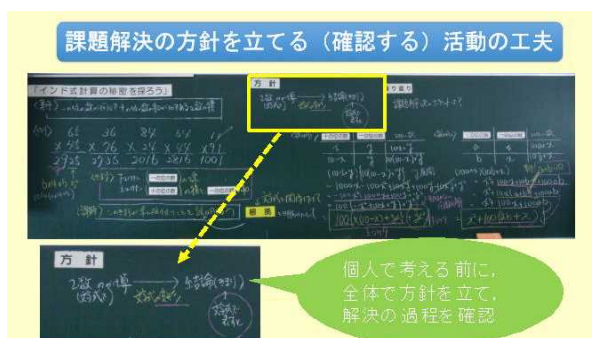
(1) 汎用的な能力としての思考力等の育成

数学科においては、課題を解決するための方針を立てる活動や学習を振り返る活動の仕方について工夫した。

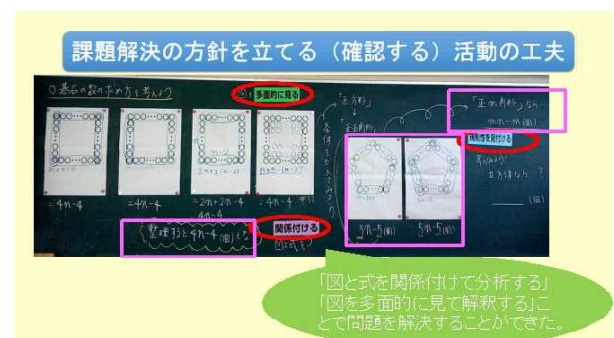


「学習課題」 思考・表現過程の具体化	方針を立てる（確認する）活動の工夫
<p>3年：式の展開と因数分解 「インド式計算の謎を探ろう」 2けたの自然数の積を求めるきまりについて、文字を用いた式や面積図を関係付けることを通して、<u>分析し</u>、そのきまりが成り立つことを<u>構想し</u>、<u>説明する</u>。</p>	<p>課題解決の方針を立てる（確認する）活動の工夫 第3学年「インド式計算の謎を探ろう」の実践</p> <p>A 個人または複数で方針を立て、学級で共有してから解決していくスタイル B 個人または複数で方針を立て、結果を全体で共有する場面で、立てた方針を確認するスタイル C 方針を立てることに言及せず、結果を全体で共有する場面で、立てた方針を確認するスタイル</p> <p>学習計画や想定される方針の立て方などを考慮して、スタイルAを選択</p>
<p>2年：図形の調べ方 「平行線とくさび形にできる角の性質について考えよう」 2本の平行線やくさび形にできる角について、既習内容を関係付け、事象を多面的に分析し、$\angle a + \angle b = \angle x$ が成り立つことを根拠を明らかに説明する。</p>	<p>課題解決の方針を立てる（確認する）活動の工夫 第2学年「平行線とくさび形にできる角の性質について考えよう」の実践</p> <p>A 個人または複数で方針を立て、学級で共有してから解決していくスタイル B 個人または複数で方針を立て、結果を全体で共有する場面で、立てた方針を確認するスタイル C 方針を立てることに言及せず、結果を全体で共有する場面で、立てた方針を確認するスタイル</p> <p>方針を立てやすく、同じ方針であっても様々な方法で考えることができる課題であるため、スタイルBを選択</p>
<p>1年：文字の式 「基石の数の求め方を考えよう」 1辺にn個の基石を並べて正方形をつくるときの基石の総数を文字式に表すために、<u>図と関係付けて分析し</u>、自分の考えを説明する。また、<u>基石の総数を表した式からその式の意味を読み取るために、図を多面的に見て解釈し</u>、考えたことを説明する。</p>	<p>課題解決の方針を立てる（確認する）活動の工夫 第1学年「基石の数の求め方を考えよう」の実践</p> <p>A 個人または複数で方針を立て、学級で共有してから解決していくスタイル B 個人または複数で方針を立て、結果を全体で共有する場面で、立てた方針を確認するスタイル C 方針を立てることに言及せず、結果を全体で共有する場面で、立てた方針を確認するスタイル</p> <p>単元の最後の課題であり、主体的に課題解決に取り組んでいくために、スタイルCを選択</p>

3年「インド式計算の謎を探ろう」



1年「基石の数の求め方を考えよう」



(2) 組織的な教科連携の実践

本校では、社会に生きて働くような思考力を育成するには、各教科が単独で実践するのではなく、各教科が組織的に連携することで、より汎用的な思考力を育成すべきだと考えた。各教科がよく扱う「思考の要素」をもとにグループをつくり、連携する教科で「思考の要素」にもとづいた目指す力を定義づけた。

組織的な連携を図った教科グループ

「解釈する」
国語・音楽

「評価する」
社会・技術、社会・家庭

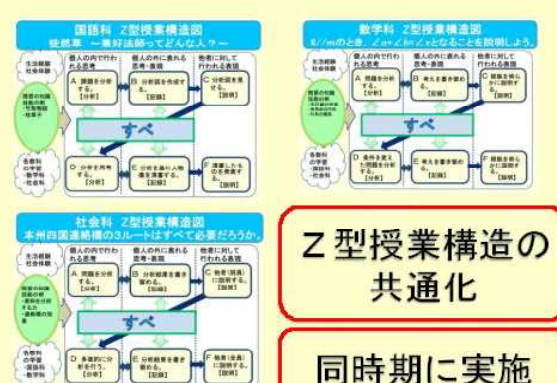
「分析する」
国語・数学・社会、理科・保健体育

「構想する」
国語・美術・英語

連携する教科で育成する「思考の要素」にもとづいた目指す力

思考の要素	目指す力(例)
「評価する」力	複数の視点(観点)を持ち、根拠に基づいて対象への意見を持つ力。
「分析する」力	事象等を分析し、根拠を明らかにする力。
「解釈する」力	根拠を基に自分なりの価値付けをする力。
「構想する」力	材料・情報を基に、考えを組み立てる力。

連携した教科では、各教科の目標を達成するとともに、Z型授業構造を共通とした授業過程で、ほぼ同時期に授業を実施することで、目指す力の育成を図った。例えば、「分析する」力の育成について、2年生の11月に国語、数学、社会が連携した。




Z型授業構造の共通化

同時期に実施


具体的な授業実践事例

国語科




徒然草
～兼好法師ってどんな人～

数学科



∟// のとき、∠ + ∠ = ∠ となることを説明しよう。

社会科



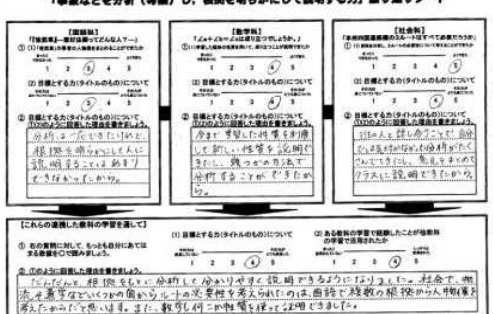
本州四国連絡橋の3ルートはすべて必要だろうか。

連携した教科では、授業を実践した後、共通の振り返りシートを用いて学習を振り返らせ、身に付いた力などを生徒自身に自覚させた。ある生徒は、次のように振り返っていた。

「国語、数学、社会において、いろいろな理由や方法を見つけて、そこからどのようにつながるのかを考えたり、話し合ったりして、最終的にそれを説明できたから、理科などの教科にはこの力を生かせようという気がする。」

振り返りシート

「事象などを分析(考察)し、根拠を明らかにして説明する力」振り返りシート



振り返りシート

【設問】
「事象を分析(考察)し、根拠を明らかにして説明する力」が成長した

「そう感じている」生徒 92%

【設問】
ある教科で経験したことを他教科の学習で活用した

「そう感じている」生徒 78%

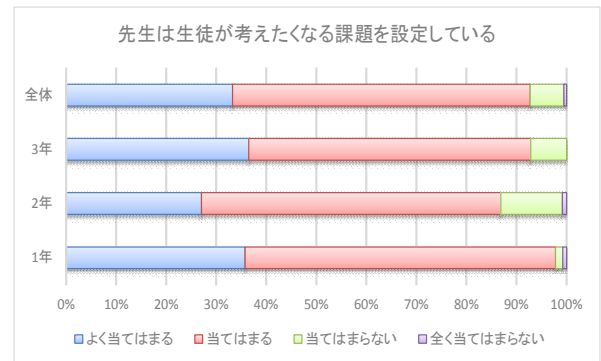
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「先生は生徒が考えたいくなる課題を設定している」目標95%以上（昨年90.9%）

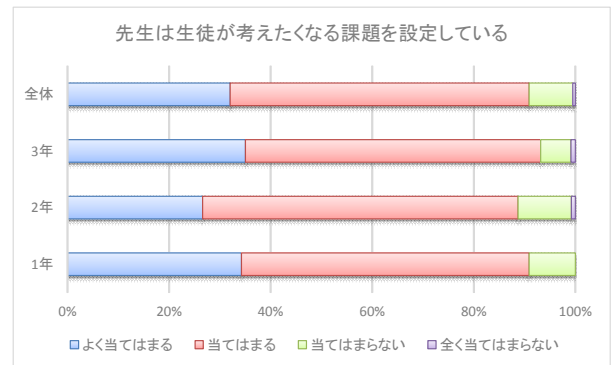
第1回（7月） 92.73%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	49	33	46	128
当てはまる	85	73	71	229
当てはまらない	2	15	9	26
全く当てはまらない	1	1	0	2



第2回（12月） 94.91%

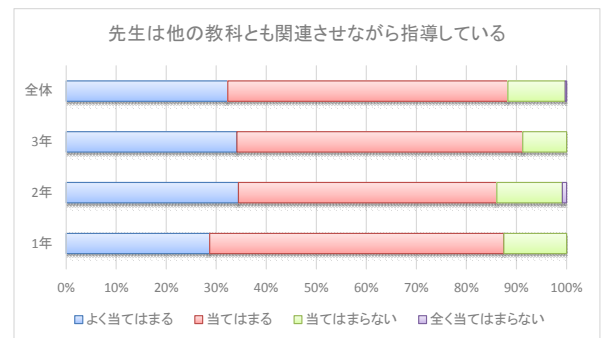
	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	54	39	45	138
当てはまる	81	81	73	235
当てはまらない	4	7	7	18
全く当てはまらない	1	0	1	2



「先生は他の教科とも関連させながら指導している」目標90%以上（本年度から）

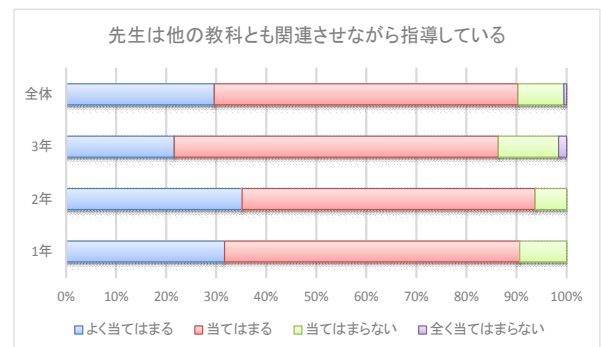
第1回（7月） 88.28%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	39	42	43	124
当てはまる	80	63	72	215
当てはまらない	17	16	11	44
全く当てはまらない	0	1	0	1



第2回（12月） 90.31%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	44	45	27	116
当てはまる	82	75	81	238
当てはまらない	13	8	15	36
全く当てはまらない	0	0	2	2



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 汎用的な能力としての思考力等の育成

当初申告	最終申告	評価
各学期に1度、自分が開発した教材を使った授業を行う。	作成した発信型の教材を取り入れたところ、生徒は主体的に学習に取り組み、深い表現ができるようになった。	A
学習形態(個人・ペア・グループ・一斉)の効果的な活用を図る。	発表会に向けてペアやグループでの学習を取り入れたことで、技能や表現力を高めることができた。	A
教材や思考を促す発問を工夫し、よく分かる授業を展開する。	各領域で思考を促す授業展開例を2つずつ作成し実践したところ、観点別評価の思考力はAが80%を超えた。	A
課題解決のための方針を立てる活動やその方針を振り返る活動を工夫して取り入れ、その検証を行う。	方針を立てる活動や振り返る活動のタイミングや内容を計画し実践したところ、振り返りが次の学習に生かされていると答えた生徒が89%になった。	B
ペア学習やグループ学習を適宜取り入れることで、多様な考え方や方法を知り思考力等を高めさせる。	ペア学習等で互いを観察し記録したことを話し合うことで、自分にあったやり方に気づく効果があった。	B

イ 組織的な教科連携の実践

当初申告	最終申告	評価
各単元の中で判断力の育成を目指した授業を2回は実践する。	資料を吟味しワークシートを作成した上で判断を求める授業を実施したところ、資料から読み取った根拠を基に自分の考えを述べる力がついた。	A
職場体験学習や修学旅行のジャンル別研修等と教科の学習内容を関連付けて授業に取り入れる。	選んだ職場やジャンルによっては、学習内容を身近に感じることはできたが、全ての生徒にとって関連付けられることができなかった。	B
考えたことを自分の言葉で適切に話したり書いたりする授業を設ける。	根拠を明らかにして自分の考えを書く授業や、どうしてそう思ったのか等を書き加える日記の書き方指導を行った。	B
論理的に思考したことを論理的に説明する授業を展開する。	授業にとどまらず日常生活の中でも「解釈」や「根拠」といった言葉が生徒に定着してきた。	B
思考力・判断力・表現力の育成を目指した課題を1か月に1回は設定する。	相手意識をもたせることによって、どのように伝えるべきかを考えさせることができた。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 国立教育政策研究所の研究指定校事業を受託し、各教科が連携しながら学校全体で思考力等の育成に取り組んでいる。本校の取組を視察に来る学校が増え、先進的な取組のモデルとして示すことができている。
- 保護者対象アンケートにおける「授業の工夫・充実」に関する項目の評価が高く、学校の取組が支持・信頼されている。
- 全国学力・学習状況調査の知識・活用問題における平均正答率が、ともに全国国公立中学校の平均正答率を大きく上回っている。

(2) 改善を要する点（課題）

- 各教科の独自性が認められる中学校の教科指導にあって、教科連携を図るメリットや連携を進めていく上でのポイント等を、分かりやすく伝えていく必要がある。
- 新しい学習指導要領に示される、各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 2 いじめの防止

平成25年6月に公布された「いじめ防止対策推進法」では、「いじめとは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定義している。その上で、学校は、その学校の実情に応じ、いじめの防止等のための対策に関する基本的な方針「学校いじめ防止基本方針」を定めるものとするとして規定している。さらに、学校におけるいじめの防止として、児童等の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人交流の能力の素地を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図らなければならないと定めている。

本校では平成26年3月に、「学校いじめ防止基本方針」を定め、いじめの防止・早期発見・対処に組織的に取り組んでいる。取組の評価として、いじめに関するアンケート調査等の結果を分析し、取組が適切に行われた否かを検証し、期待するような指標等の改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行うことにしている。

<いじめの未然防止のための取組> 「附属中学校いじめ防止基本方針」から

1 教育・指導場面

- ①「いじめは人間として絶対に許されない」との強い認識を、学校教育全体を通じて、生徒一人一人に徹底する。
- ②教育活動全体を通じた道徳教育や人権教育の充実、読書活動・体験活動などの推進により、生徒の社会性を育むとともに、幅広い社会体験・生活体験の機会を設け、他人の気持ちを共感的に理解できる豊かな情操を培い、自分の存在と他人の存在を等しく認め、お互いの人格を尊重する態度を養う。
- ③全ての生徒が心の通じ合うコミュニケーション能力を育み、規律正しい態度で授業や行事に参加・活躍できる授業づくりや集団づくりを行う。
- ④授業についていけない焦りや劣等感などが過度なストレスとならないよう、一人一人を大切に、学ぶ喜びのある授業づくりを進める。
- ⑤ストレスを感じた場合、それを他人にぶつけるのではなく、運動や読書などで発散したり、誰かに相談したりするなどストレスに適切に対処できる力を育む。
- ⑥学校の教育活動全体を通じ、生徒が活躍し他者の役に立っていると感じたり、困難な状況を乗り越え充実感を味わったりすることができる体験の機会を全ての生徒に提供し、生徒の自己有用感が高められるよう努める。
- ⑦学級活動や道徳の時間に、いじめに関わる問題を取り上げ、いじめは人権侵害であり、絶対に許されない行為であることを毅然と指導する。
- ⑧携帯・スマートフォン・パソコン等を使って他人を誹謗・中傷する情報を発信することは「いじめ」であり、決して許される行為ではないことを生徒に徹底するとともに、インターネットを通じて送信される情報の特性に関する学習や情報モラル教育について学校全体で取り組む。
- ⑨生徒会活動などにおいて、生徒自身の主体的な参画によるいじめ問題への取組が促進されるよう適切な指導や助言を行う。
- ⑩生徒の言葉や態度及び遊び等に注意を払い、不適切な場合は指導する。
- ⑪教職員の言動が、生徒を傷付けたり、他の生徒によるいじめを助長したりすることがないように、細心の注意を払う。
- ⑫いじめが解決したと見られる場合でも、継続して十分な注意を払い、折に触れて必要な指導を行う。

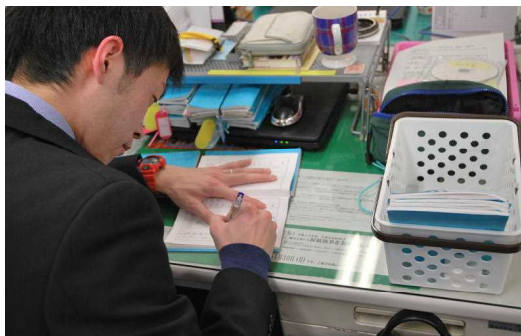
2 家庭・関係機関・地域社会との連携

- ①学校いじめ防止基本方針や指導計画を公表し、保護者や地域住民の理解を得るよう努める。
- ②家庭や地域社会と連携して、いじめ問題の解決に向けた取組を進める姿勢を示すとともに、必要に応じて警察・児童相談所との円滑な連携や情報の共有を図る。
- ③保護者会、市内中学校及びそのPTA組織、関係機関とともに、いじめ問題について協議する機会を設け、いじめの根絶に向けて、地域ぐるみの対策を推進する。

1 実践事項への取組

(1) 生徒の悩みの把握と情報交換

ア 日記指導



生徒の悩み

私には将来の夢がありません。良い高校や大学に入っても、良いことがあるように思えません。周りからの評価が上がるだけのように感じます。一生懸命勉強することが大事なのは百も承知ですが。

生徒は、毎日の出来事や感じたことを日記に書いて来て、朝の会で学級担任に提出する。学級担任は、授業の空き時間に職員室で日記に書かれていることを読み、コメントを書いて帰りの会で返す。その中で、友人関係や進路等に関する悩みを書いてくる生徒もあり、気になる生徒に対しては、直接話を聞くようにしている。

教員のアドバイス

何のために勉強するのでしょうか。私の人生も1/3ぐらいが終わりましたが、何が正解だったかよく分かりません。その都度いろんな人生の選択をしてきましたが、後悔していません。今ここで具体的な夢を決める必要はないと思います。自分の可能性を広げられそうな魅力的な高校を選ぶことが大切ですね。

イ 二者面談



新学年が始まってしばらくした時期に、学級担任と生徒が二者面談を行い、新しい学級や環境の中での居心地やこれからの希望について話をする。後期にもう一度、二者面談を行い、現在の様子や次年度への期待などを聞き取る。短い時間ではあるが、全員と話をする場を設定することで、普段は面と向かって言いづらいことを話せる機会となっている。

保護者を交えた三者面談は、夏休みと冬休み期間中に行っている。

ウ 三役会議



各学級には、生徒から選出された三役（議員、総務委員、生活委員に各2名）がいて、学級会の司会や学校行事の運営等で活躍している。週に1回程度、放課後の教室で学級担任と三役とが学級の課題について話し合う機会を設けている。その中で生徒から建設的な意見が出て、学級全体へ広めていくこともある。

第1学年では、学期に1回、学年の三役が放課後に集まり、学年全体の課題や取組について話し合う場を設定している。

(2) 本音で語り合う活動の実践

「アサーショントレーニング（1年）」

よりよい人間関係を築いていく力を育てるためのソーシャル・スキル・トレーニングの一環として、自分も相手も大切にしたい、さわやかな自己表現（アサーティブな表現）があることが分かり、自分の考えを相手に伝えることができるように支援している。

シミュレーション

6人グループでスケートに行くことにしました。当日、駅で10時に待ち合わせをしていたのですが、まもるくんだけは、10時を過ぎてなかなか来ません。10時20分になった頃、まもるくんがやっと来ました。「ごめん。ごめん。遅れちゃって…」そこであゆみさんは、「……。」

Q.あなたがあゆみさんなら、遅れてきたまもるくんにどのように言いますか？

あゆみさんの顔

まもるくんの顔

A 受け身的
※相手のことを気にしすぎて自分の思いを伝えられない。

相手だけが満足
「うん、気にしてないから。」
「もう、しかたがないね。」

B 攻撃的
※相手のことを考えないで自己主張する。

感情的になって、フツン！
「まもるくん、いつまで待たせたら気がすむのよ！つらねをやらせたいんだからもう、しつこいわけがない！」

C 主体的
※自分と相手の両方を考えて伝える。

素直に受け入れ、円満に解決
「どうしたの？私ま、心配してたのよ。今日は、遅れちゃってごめん。遅れるならだれかに言っておいてね。」

「教材の開発（2年）」

人権教育で使用している副読本『わたしの願い（発行：徳島県中学校人権教育研究会）』に採択されている教材「ブッタとシッタカブッタ（筆者：小泉吉宏，発行：メディアファクトリー）」の原本から、本校の生徒の実態にあったテーマを選択し、生徒の本音を引き出す教材を開発した。

なんでこうなるの!? ～ブッタとシッタカブッタとツッコミブッタ～

2年()組()番 氏名()

ツッコミブッタは世の中のあらゆるモヤモヤや疑問にツッコミを入れたり真実をズバリと述べたりするのだっ!!!

④の場面に対する生徒のツッコミ

「学級の実態に応じた展開の工夫（3年）」

道徳の授業で使用している副読本『私たちの道徳（発行：文部科学省）』や『徳島県版私たちの道徳（発行：徳島県中学校道徳教育研究会）』に掲載されている教材について学年で研修し、授業のねらいを確認した上で、学級の実態に応じて展開を工夫した。

例「ネパールのビール」「カーテンの向こう」「二人の弟子」

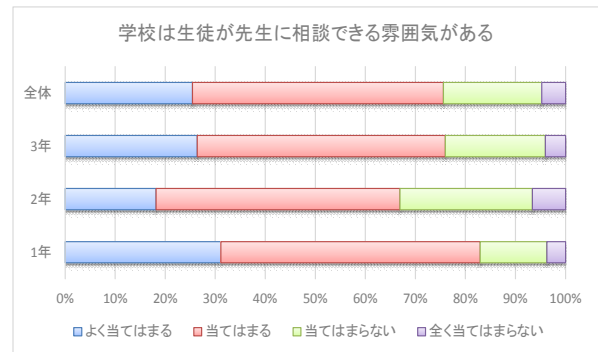
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「学校は生徒が先生に相談できる雰囲気がある」 目標85%以上（昨年81.5%）

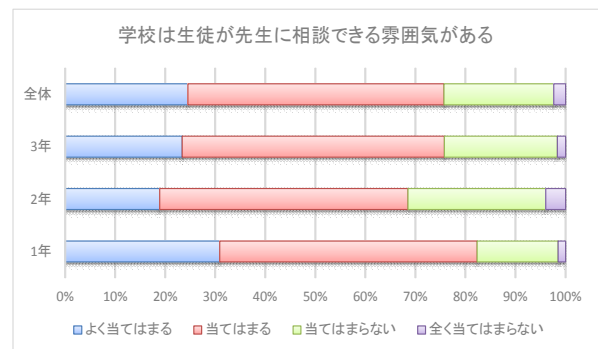
第1回（7月） 75.59%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	42	22	33	97
当てはまる	70	59	62	191
当てはまらない	18	32	25	75
全く当てはまらない	5	8	5	18



第2回（12月） 75.71%

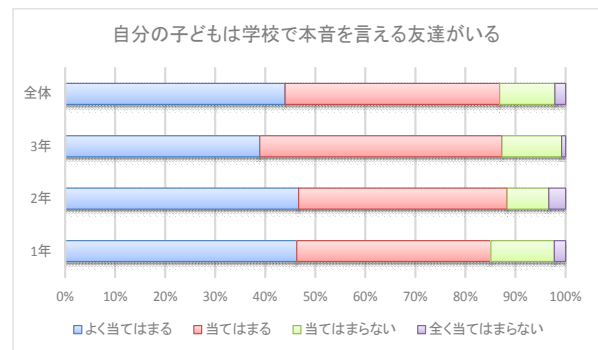
	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	42	24	29	95
当てはまる	70	63	65	198
当てはまらない	22	35	28	85
全く当てはまらない	2	5	2	9



「自分の子どもは学校で本音を言える友達がいる」 目標85%以上（本年度から）

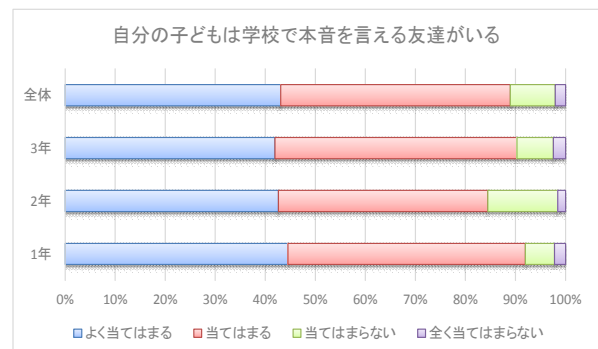
第1回（7月） 86.84%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	62	56	49	167
当てはまる	52	50	61	163
当てはまらない	17	10	15	42
全く当てはまらない	3	4	1	8



第2回（12月） 88.98%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	61	55	52	168
当てはまる	65	54	60	179
当てはまらない	8	18	9	35
全く当てはまらない	3	2	3	8



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 生徒の悩みの把握と情報交換

当初申告	最終申告	評価
適宜学年集会を行い，学年としての目標の意識付けを図ることで，連帯感を高める。	学年団が協力しあい，学年集会の継続的な指導を通して，生徒の意識の向上が見られるようになった。	A
授業開始前や昼食後できる限り生徒と共に過ごす時間を作り，生徒理解に努める。	授業開始前の生徒の様子を観察し，友人関係が変わったり，一人でいる場面が増えたりしたことを学級担任に伝え，気にかけてもらうようにした。	B
Q-Uを年2回実施し，その結果を生徒理解に活用できるよう資料や情報を提供する。	Q-Uに関する資料や情報を提供したが，結果に基づいた生徒理解や学級経営に反映させたい。	B
三役による会議を定期的に行い，課題等を把握し，生徒と一体となって改善を図る。	三役にリーダーとしての自覚が育ち，建設的な意見が多く出てくるようになった。	B
学年，部活動ともに，生徒のよいところを徹底的にほめる。	「毎日3人以上へのほめ言葉」の達成率は100%であった。	B

イ 本音で語り合う活動の実践

当初申告	最終申告	評価
毎朝メッセージを教室の黒板に提示し，生徒の活動や日記の内容を紹介することで，自己肯定感を高めるようにする。	毎日続けることができ，級友の努力を認めている内容などを掲載することで，学級が楽しいと言った日記の記述や肯定的な文章が増えた。	A
明るいあいさつや声かけを継続して行う。	係活動には「ご苦労様」，教室移動の際は「行ってらっしゃい」「お帰りなさい」と声をかけることで，日記や会話での相談が増えてきた。	B
教師が自分の経験や思いを本音で語ることで，生徒との距離を縮める。	教師と生徒との信頼関係はある程度高まったが，生徒同士の信頼関係を高めたい。	B
道徳の時間を充実させるために，心に響く読み物教材の工夫や自作教材を5つ以上作り，学年共通で展開する。	学年で5回研修会を開き，発問や導入・終末について検討するとともに，自作教材を使った授業を4回実施した。	B
帰りの会で，全員に1度はみんなの前に出る機会を設け，お互いのことを知り合うチャンスをつくる。	得意分野を公開したり，インタビュー形式の質問を取り入れたりして仲間を知り，生徒が主体的に学級を良くしようと考えるようになった。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 授業の中での話し合い活動やグループ活動を充実させ、日常的に人間関係が良好に保てるように取り組んでいる。
- 保護者対象アンケートや全国学力・学習状況調査の生徒質問における「楽しい学校生活」に関する項目の評価が高い。
- 生徒対象生活アンケートや全国学力・学習状況調査の生徒質問における「いじめはいけない」という意識が高い。

(2) 改善を要する点（課題）

- 生徒と向き合う時間を確保するとともに、生徒にとって居心地のよい環境や雰囲気をつくる努力を続け、いじめや不登校の未然防止に取り組む。
- 道徳教育や人権教育、情報モラル教育に関する教員研修を充実させ、生徒の心を耕し生徒同士が繋がる方法や機会の提供について共通して取り組む。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 キャリア教育の推進

平成23年1月に、中央教育審議会の答申である「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」が取りまとめられ、キャリア教育の新たな方向性や発達段階に応じたキャリア教育の充実方策が示された。その中で、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。

従来型の進路指導は、入試が終われば進路指導は終わるという、集中的な支援として捉えられていたが、キャリア教育では、生涯を通じた人間形成という視点から指導することが必要となる。また、幼稚園から高等学校へとキャリア教育を進める中で、中学校段階においては、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方について考えさせるために、職場体験等の体験的な学習活動を通して、現実の社会を学ぶ活動を推進することが大切である。

本校では、キャリア教育目標として「学校や家庭や地域社会の中で、自分の役割を果たしながら将来に夢をもって生きる生徒の育成」を掲げるとともに、本年度の教育活動における重点目標の一つとした。

鳴門教育大学附属中学校 キャリア教育全体計画

保護者の願い ・大学の附属学校であることの特長を生かした教育活動。自己実現へ向かう調和的人格の伸長。 地域や産業界の願い ・勤労意欲をもち、社会貢献に寄与することができるリーダーとしての資質の育成。	学校教育目標 知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。 目指す生徒像 ・目標をもち、自主的、創造的に学ぶ生徒 ・強靱な意志と身体をもち、たくましく生き抜く生徒 ・優しく思いやりの心をもち、人につくす生徒	生徒の実態 ・全国学力調査の質問紙調査「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」において、肯定的回答が大変多い。一方で、「今住んでいる地域の行事に参加している」において、肯定的回答の割合が少ない。	
本年度の重点目標			
社会に生きて働く思考力等の育成 文部科学省の指定研究を生かして、社会に生きて働く思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業を創造し、研究の成果の普及を図る。	いじめの防止 授業等における言語活動やグループ活動を充実させたり、道徳科や短学活の指導を工夫したりして、相互理解を進める。	キャリア教育の推進 教育実践を通して目指す生徒の具現化や、役割を明確にして係活動を徹底することで、自分らしい生き方の実現を図る。	
キャリア教育目標(目指す生徒像)			
○ 徳島県のキャリア教育目標:「夢や目標をもって努力し、主体的・協同的に学び続ける生徒の育成」 ○ 本校のキャリア教育目標:「学校や家庭や地域社会の中で、自分の役割を果たしながら将来に夢をもって生きる生徒の育成」			
キャリア教育で育成すべき能力・態度			
かかわる力	みつめる力	すすむ力	えがく力
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
・他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 ・人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を養う。 ・リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。	・自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 ・自分の悩みを話せる人を持つ。	・自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 ・よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。	・生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・整理し活用する。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 ・進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。
各学年における重点目標			
1学年	2学年	3学年	
・自分の良さや個性が分かる。 ・自己と他者の違いに気付き、尊重しようとする。 ・集団の一員としての役割を理解し、果たそうとする。 ・将来に対する漠然とした夢やあこがれを抱く。	・自分の言動が他者に及ぼす影響について理解する。 ・社会の一委員としての自覚が芽生えるとともに社会や大人を客観的にとらえる。 ・将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し、模索する。	・自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進める。 ・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 ・将来設計を達成するための困難を理解し、それを克服するための努力に向かう。	

1 実践事項への取組

(1) 清掃活動の活性化

ア 縦割り清掃活動

将来の生き方・働き方につながるよう、現在、生徒が生活している学校の中で、自分の役割を果たしながら他者とかがわり、集団に貢献していく態度を培うために、清掃活動の活性化を図った。本校に籍を置いて大学院で生徒指導を研究している教員と連携し、「縦割り清掃」を試みた。

目的 ○ 異年齢集団での清掃を通して、他学年の清掃に関する考え方を学び、自らの清掃意識の向上へつなげられるようにする。

○ 異年齢集団での清掃を通して、自分の立場を踏まえた他学年の人との関わりを考えられるようにする。

内容 ○ 2・3年生の整備委員と生活委員、1年生の清掃係がグループをつくり、通常清掃でできない箇所を一緒に清掃する。

○ 一週間程度、校舎や自転車置き場周辺の除草作業をする。



感想 ○ 知らない1年生へ掃除のやり方を説明しながら、一緒に活動するのはとても大変だった。自分は、これまで何げなく掃除していたけれど、意識の持ち方で掃除のやり方は変わると思った。(3年生)

○ 清掃をはじめの前と比べて草が一本もない状況を見ると、嬉しいし、気持ちがよい。(2年生)

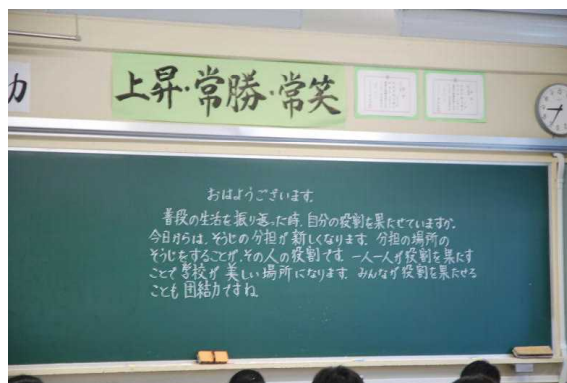
○ 入学して学校のことがよく分からないときに、3年生から掃除のコツを教えてもらったのでよかった。緊張したけれど、3年生と話すことができてよかった。(1年生)

考察 ○ 清掃活動の意味を教師が直接的に指導することは大切であるが、生徒自身が意味を見出していく環境を整えることも大切である。

イ 清掃活動への啓発



週目標「清掃の時間は成長の時間」



朝のメッセージ「新しい掃除分担」

(2) かかわる力, みつめる力, すすむ力, えがく力の育成

ア かかわる力の育成

「外国人留学生との交流学習（1年）」



1年生の総合的な学習（国際化領域）の中で、徳島に来日している留学生と交流する機会を設定した。

国際化領域の目標は、「国際理解を通して、広い視野を持つことができる」であるが、キャリア教育の視点からは、「他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする」といった人間関係形成・社会形成能力（かかわる力）の育成を図った。

「幼児とのふれあい体験学習（3年）」



技術・家庭科（家庭分野）の学習で、11月21・22・24・29日に各学級ごとに附属幼稚園を訪問し、幼児とのふれあいを体験した。

体験前に幼児の特性等を確認し、体験後には幼児との関わり方について考える授業を展開した。キャリア教育の視点からは、「他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする」といった人間関係形成・社会形成能力（かかわる力）の育成を図った。

イ みつめる力

「職場体験学習（2年）」

働くことの大切さ、責任感を学び、社会の一員としての在り方を考えさせたり、労働を体験し、自分の生き方について考えさせたりすることを目的に、6月29日～7月1日の3日間、職場体験学習を実施した。後日、保護者や1年生に向けて、学んだことを発表した。

「自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる」といった自己理解・自己管理能力（みつめる力）等の育成を図った。



徳島大学病院



エフエム徳島



木のいえ保育園



北島組



フルーツガーデン



うずしお汽船

<発表会>



ウ すすむ力

「委員会・係活動や部活動」



毎日の学校生活において、集団生活を営む上で自分の役割を果たす意義を理解させ、主体的・協動的に取り組む態度を育てようとしている。生徒会の委員会活動や学級の係活動では一人一役を担当し、リーダーやフォロワーそれぞれの立場で、より良い生活を送ることができるように考え行動させてきた。

また、部活動においても、目標達成のために先を見通した段取りをリーダーに伝え、責任感を持たせて生徒に任せる場面をつくることで、練習計画や方法を自分たちで考え、任された期待に応える態度が現れてきた。

「自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる」といった課題対応能力（すすむ力）等の育成を図った。

エ えがく力

「高校体験入学（3年）」

夏期休業中（8月）に県内各高校で実施される体験入学について、生徒と保護者に紹介するとともに教員も参加し、各校の特色ある取組等を理解し、進路指導の参考となる情報を収集した。

「進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する」といったキャリアプランニング能力（えがく力）の育成を図った。

「高校説明会（3年）」

10月26日に徳島市内の高校の先生を招き、生徒と保護者に対して各校の特色や卒業後の進路等について説明していただいた。高校入学から卒業後までの将来を見通した上で、進路決定を促す機会となった。

「生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・整理し、活用する」といったキャリアプランニング能力（えがく力）の育成を図った。

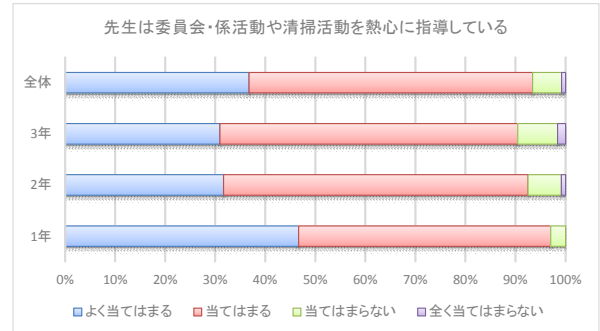
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「先生は委員会・係活動や清掃活動を熱心に指導している」目標95%以上（昨年90.9%）

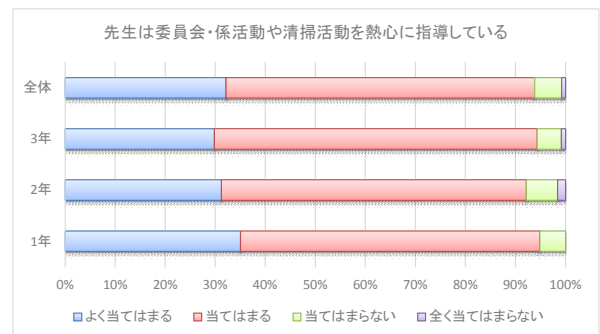
第1回（7月） 93.44%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	63	38	39	140
当てはまる	68	73	75	216
当てはまらない	4	8	10	22
全く当てはまらない	0	1	2	3



第2回（12月） 93.83%

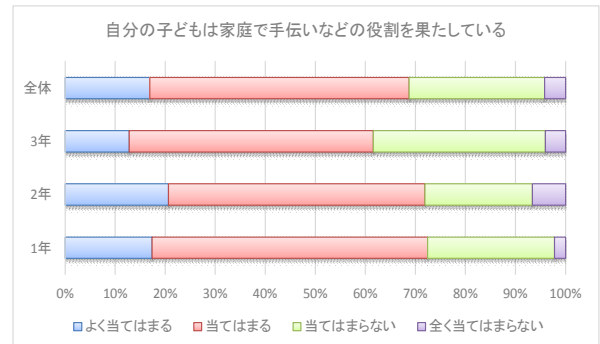
	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	48	40	37	125
当てはまる	82	78	80	240
当てはまらない	7	8	6	21
全く当てはまらない	0	2	1	3



「自分の子どもは家庭で手伝いなどの役割を果たしている」目標75%以上（昨年70.0%）

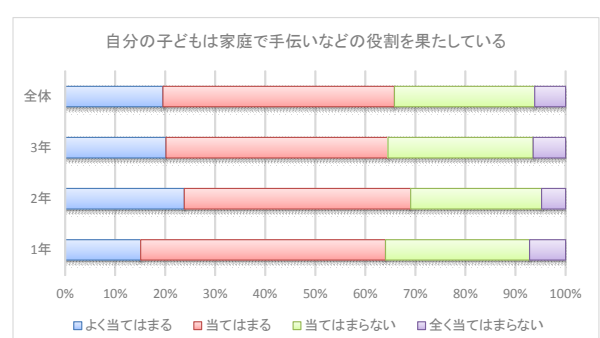
第1回（7月） 68.75%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	24	25	16	65
当てはまる	76	62	61	199
当てはまらない	35	26	43	104
全く当てはまらない	3	8	5	16



第2回（12月） 65.81%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	21	30	25	76
当てはまる	68	57	55	180
当てはまらない	40	33	36	109
全く当てはまらない	10	6	8	24



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 清掃活動の活性化

当初申告	最終申告	評価
生徒と一緒に清掃しながら、少しでも自主的にできたときは賞賛や感謝の言葉を伝える。	遊びがちな生徒と一緒にしているうちに次第にするようになっていたり、全くしなかった生徒が突然するようになっていたりした。	A
生徒と一緒に清掃し、教師が見ていないところでも清掃に取り組むよう、清掃に対する意識の向上に努める。	巡視範囲が広く指導が十分に行き届かない場所は、学級での指導や担任の巡回をお願いし、生徒に具体的な指示をすることで少しずつ清掃に取り組むようになった。	B
自分が行うことを責任を持ってできるように指導するとともに、すすんで清掃ができる態度を育てる。	掃除をしない生徒が減り、注意することが少なくなった。	B
効率の良い清掃の仕方を教えることで、協力しながら行う喜びを感じられるようにする。	教室の清掃が協力して素早くできるようになり、時間の有効な使い方を学ぶことができた。	B

イ かかわる力、みつめる力、すすむ力、えがく力の育成

当初申告	最終申告	評価
あいさつ運動などへの参加を呼びかけ、活動の輪を広げていく。	あいさつ運動はボランティアの輪が広がり、活性化を図ることができた。	A
働くことについて修学旅行などで得た学びをワークシートに記録させ、家庭に伝える。	家庭へは紙媒体として学年通信を配付したが、ホームページに掲載するなど、広く伝えていきたい。	B
委員会において生徒自らが考えた掲示物を各学期2枚ずつ作成する。	それぞれ季節やテーマに合った掲示物を作成することができた。	B
部活動において、一人一役の役割分担とリーダーの育成を行い、組織的な運営が図られるようにする。	部長や副部長、リーダーを中心として生徒が積極的に部活動運営に取り組むようになった。	B
キャリア教育の目標を踏まえた計画的な学級活動の授業を实践する。	各学級担任と話し合いながら、計画的に実践することができた。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- キャリア教育で育成すべき能力・態度「かかわる力，みつめる力，すすむ力，えがく力」を意識した教育実践に取り組んだ。具体的には，3日間の職場体験学習を充実させたり，日々の係活動を徹底させたりしながら，キャリア教育に取り組んでいる。
- 清掃活動の活性化を掲げ，大学院生と連携しながら，学校全体で「一点突破・凡事徹底」の意識で取り組んだ。
- 全国学力・学習状況調査の生徒質問における「自分にはよいところがある・将来の夢や目標がある」に関する項目の評価が高い。

(2) 改善を要する点（課題）

- 清掃へ取り組む姿勢はまだ十分とは言えず，あいさつ，時間を守る，物を大切にする等にも課題があるため，生徒に響く指導を工夫する。
- 学校での役割は果たしていることを，家庭や地域でもできるように，役割の設定や意識付けを保護者へ依頼するなど，家庭との連携を深める。

以上の内容を総合し，4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが，成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は，以下同じ

Ⅲ 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	添付	別添	資 料 名	備考
1	1・2・3		○		平成28年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	
2	1・2・3	資料2		○	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	資料3		○	平成28年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	資料4		○	学校におけるいじめの問題に対する日常 の取組	資料回収
5	2・3	資料5		○	平成28年度生活アンケート集計結果	資料回収
6	2・3	資料6		○	平成28年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収